



Desert Wind

『万物の終わりが近づいている』(1ペテロ 4:7-11)

LVJCC 牧師: 鶴田健次

時どき、世の中には、この世の終わりがいつであるかを唱える人がいます。以前「エホバの証人」が、1914年に世の終わりが来ると言いましたが外れました。他にも色々なカルト宗教がいつ世界の終わりが来ると言ってきましたが、すべて外れました。

そういう中で、正当なキリスト教会の中には、終末に関して語ることに慎重になり過ぎ、その結果、終末を語らなくなってしまった教会もあります。しかし、聖書の終末論は非常に大事な教義ですから、私たちは聖書をきちんと学び、正しい終末理解を持つ必要があります。

第一ペテロ 4章7節で、ペテロは、「万物の終わりが近づいている」と言っています。さらに「ですから…」と言って、その先に話の続きがあることを示唆しています。それは「終わり」が単なる「終わり」ではなく、同時に、新しい「始まり」であることを意味します。そして、新しい始まりは、「神の審判」の向こう側にあり、神の審判で有罪判決を受けるか、無罪判決を受けるかで、その人の永遠が明らかになるのです。そこで今回は、今の時代をどう生きるべきかについて、三つの事をお話します。

① 心を整え、身を慎んで祈る(7節)

ペテロは、万物の終わりが近づいてきたので、祈りのために、心を整え、身を慎みなさいと言いました。つまり、終わりの時代に備えるために、まず大事なことは、心を整え、身を慎んで「祈る」ということです。身を慎むというのは、何かに酔わないということです。酔うのはお酒ではありません。苦しみの多い人生において、人々は何かに酔わないでは生きていけないという現実があります。何かに酔うことで、現実から逃避したいと思うのです。ドラッグに酔う人、仕事や研究に酔う人、思想や主義に酔う人、富や権力や知識や名誉に酔う人、ギャンブルや趣味やスポーツに酔う人がいます。そういう現実の中で、私た

ちは祈りのために心を整え身を慎まなければならないのです。

②互いに熱心に愛し合う(8、9節)

ここでは、万物の終わりに備える生き方として、「愛し合う」ということが挙げられています。祈りが神様に対するものであるなら、愛は人に対するものです。この愛について、まず「互いに熱心に愛し合いなさい」と勧められています。

聖書が教える「互いに」という人間関係の概念は、難しい言葉で言うと、「相互服従」という概念で、とても重要なものです。それは、一方だけが他方を愛するのではなく、お互いが愛し合うという関係、あるいは、自立した者同士の愛の関係ということです。クリスチャンとして自立した者の愛は、自己中心の愛ではなく、聖霊によって与えられる意思的な愛です。

ですから、ここで言われている、「互いに熱心に愛し合いなさい」というのは、自立した者同士、意思的な愛で愛し合いなさい、ということです。つまり、自分を喜ばせ、自分を満足させるために相手をお愛するのではなく、相手の益を考え、相手を喜ばすために愛するということです。

③神の恵みの良き管理者として生きる(10、11節)

ここでペテロは、「神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を生かして互いに仕え合う」ことを勧めています。やがて私たちの人生も終わりを迎えます。この事実、私たちが今持っているものは本当の意味で私たちの所有ではない、ということの意味です。能力にせよ、何にせよ、私たちは人生の途上で色々なものを手放しながら生きていきます。そして、やがてすべてを手放す時がやってくるのです。

もともと私たちは何も持っていないで生まれました。ですから、すべては神様から与えられたものです。だからこそ「賜物」なのです。特にここでは、神から与えられた「聖霊の賜物」のことが強調されています。「聖霊の賜物」とは、神の奉仕をするための能力のことです。そこで、それぞれが、この賜物の「良き管理者」として、それを上手く使い、管理して、神の栄光を表しなさいというのが、終わりの時代に備える私たちの生き方なのです。

DREAMS COME TRUE

- ✠ 教会堂の建設
- ✠ 敬老ホームの設立
- ✠ 幼稚園の設立

お祈りのリクエスト

- 日本の家族の救い
- 各スモールグループのオイコス伝道のために
- 入門者クラスのために山口兄、福留兄、石原兄姉
- 英語部の働きのために
- ユースミニストリー、サンデースクールのために
- 癒しの祈り: 恵理奈ちゃん、倉田一徳さんの脳腫瘍、神崎先生の目、植木ケン兄の糖尿病、新井雅之兄の癌、中村裕二先生の直腸癌、藤永君江姉の癌、Simeon 兄の癌、スカイ君の心臓、工藤忠行兄の癌

Desert Wind では、ご意見・質問等何でも受け付けております。
lvjccdw@hotmail.co.jp
発行: 鶴田健次
編集: 松岡みどり



編集室・気まま便り

イエス・キリストの御降誕おめでとうございます。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった」これ以上のギフトがこの世の中にあるのでしょうか。神様は全ての人々のために御子を御与えくださいました。できることなら世界中の人がイエス・キリストを心に迎え入れ、大いなる神の愛に恵まれていただきたいと心からお祈り致します。

この1年間デザートウインドをご愛読くださいまして感謝致します。皆様の上にキリストの恵みと祝福が豊にありますように。また2012年が主の平和で満たされ、希望にあふれた良き新年をお迎えになりますようお祈り致します。



「父との時間」証し: 香織 Banks

私の父は昭和17年9月13日に岡山県倉敷市で生まれ、岡山市で育ちました。4人兄弟の2番目で、高校から親元を離れ旧国立詫間電波高等学校を卒業、建設省に勤めた後、全日本空輸を定年退職し、毎日が日曜日と定年後を楽しみ、また好奇心旺盛でたくさんの趣味を持ち、孫をとててもかわいがり、いつも優しく勤勉な父でした。そんな父を心から尊敬します。

父は3年前の訪米中に鶴田先生から入門クラスを受けた際、イエス様を救い主として受け入れ、イースターに洗礼の恵みにあずかりました。それは本当にただただ恵みで時にならなりました。私がアメリカに移った1999年から両親は毎年アメリカに来てくれました。今思えばアメリカ訪問の一つの目的はイエス様に会うためであったことを思います。私が洗礼を受けた2006年以降、父は私と一緒に教会に来てくれました。そして祖母が亡くなったのを機に、入門クラスを受けることになりました。きっと父は死んだらどうなるのかという深い疑問があったのだと思います。

一昨年3月に宣告された胃癌は免疫療法により昨年の12月にほとんどなくなり、今年6月には医師から旅行の許可も下り、アメリカに来てくれました。ですが、容態が急変し、予定を早めて帰る事になりました。帰国後父はほっとしていたそうです。医師の紹介で家の近くのクリニックに入院、数週間後に退院し、看護婦さんが毎日診察してくれ安心できるその病棟の3階の部屋を借り、8月6日に日本に帰国した私も母と共に寝泊まりし看病が始まりました。

父にしてあげたい事は沢山ありました。まず賛美をしなごら、腹水を取る為に生姜湿布でお腹を温め、その後芋湿布をしました。時にはそば粉パスターというのも使ってみました。またこんにやく湿布で肝臓、丹田、腎臓、足心などを温めたりもしました。ひとつひとつ手当をする前に必ず父に「○○していい?」と聞いて行ないました。毎日体調が違うので確認して、生姜油で体全体のマッサージ。熱のあるときは額に豆腐パスター、熱が無くて頭痛の時は大根おろし湿布、癌の部分にはびわの生葉、びわ葉と里芋の湿布、またびわ葉温灸をしたりしました。いつも父に「気持ちいい?」と聞きながら、気持ちいい時間だけ手当てをしました。また、ただ父の手を握り「お父さん大好きだよ。ずっと一緒だよ。」とその時を噛み締めていました。

弱った体には長時間の手当は疲れてしまい、もつとしてあげられない事に焦る気持ちもありました。

手当は常に賛美し祈りながら、心を込めて行ないました。賛美をしていると、平安が私達の心を包み、焦る気持ちを落ち着かせ、祈り心を引き出してくれました。そして賛美と祈りが手当に用いられ、父に平安と癒しが与えられていました。先生も看護婦さんも父のはっきりとした口調、痛みの小ささ、2回の危篤状態からの復帰を驚き、「これは奇跡だ」とおっしゃっていました。父が口ずさむ大好きな賛美は、『いつしみ深き』や『ただ主を崇めて』、『神の国と神の義』、『君は愛されるために生まれた』などでした。

父は物静かな人柄で、最後まで不平を言わず、穏やかでした。振り返ると、天に近づくにつれ父の心は砕かれ、神様を思い、ますます穏やかに、素直になっていました。また笑顔も絶やさず、家族思いの父でした。神様に触れられることで心の蓋が取れ、父が一番自分らしく素直にいられるように神様が変わって下いました。例えば、父は長年英語を勉強していたのですが、今までは機会があっても英語を話さませんでした。が、この1ヶ月間は自ら何度も英語を話し、周りの人を必要以上に気にせず自分の気持ちを素直に表現してくれました。

父を天に見送る数週間を双子の直美と母と共に過ごせた事は私の生涯の貴重な体験となりました。神様が家族を父の元に集め、手当に必要なものをすべて与え、共に傷みを負い合い、助け合えたのは本当に感謝なことです。そして父が願ったとおり長年住んだ家に戻り、家族に見守られながら勝利の凱旋をし、今日のお父様と共にいます。

アメリカ、日本にいる神の家族が私達の為に祈って下さり、励ましと平安を与えて下さいました。祈りを聞いて下さった神様、また祈りで支えて下さった祈りの勇士に心から感謝します。そして天国で父に再会できる約束が与えられていることを感謝します。「我らの国籍は天に在り」(ピリピ 3:20)

「更にまた祈るのは、あなたがたが、神の栄光の勢いにしたがって賜われるすべての力によって強くされ、何事も喜んで耐えかつ忍び、光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった父なる神に、感謝することである。神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移動して下さいました。わたしたちは、この御子によってあがない、すなわち、罪のゆるしを受けているのである。」(コロサイ 1:11-14)